

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520156

研究課題名(和文)戦後ドイツにおけるフォークリバイバルの音楽文化論的研究

研究課題名(英文)Music-historical research about folk revival in the FRG and the GDR

研究代表者

阪井 葉子(三谷葉子)(Sakai, Yoko)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：50243142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：戦後東西両ドイツにおいて、アメリカ合衆国発の運動の影響下に発生・発展したフォークリバイバル運動について、フォークフェスティバルの役割や、東ドイツのフォークリバイバル運動ならびにポピュラー音楽全般の西欧諸国との意外に太い繋がりを、資料調査ならびに関係者のインタビューを通じて明らかにすることができた。さらに、伝統音楽復興運動としてのフォークリバイバルとの関わりで、贖罪の意味を込めて東方ユダヤ人の言語イディッシュ語による民謡をうたったドイツ人歌手の活動、その意義と困難について、あるいは、オーストリアにおける民族的マイノリティ・ロマの音楽活動について、事例とその意味を考察した。

研究成果の概要(英文)：We have reconstructed the course of the folk revival movement in the FRG and the GDR and investigated its meanings in the postwar German music culture.

At the same time we detected the close relations of the music culture in the GDR with the west-European popular music, conflict of the folk musicians and rock musicians with the cultural policy in the GDR and the importance of the music and music festivals for the ethnic identity of Austrian Roma.

研究分野：音楽民俗学

キーワード：フォークリバイバル運動 ポピュラー文化 対抗文化 口承性 民族的マイノリティの音楽 文化政策
ドイツ、オーストリア 音楽フェスティバル

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の出発点は、高度産業化・メディア化社会における民謡・伝統歌謡継受の形態として、1950年代のアメリカ合衆国で始まり、ヨーロッパ・日本をはじめ世界各地へ波及したフォークリバイバル運動を取りあげることであった。これは、もともと民謡研究史の研究を続けてきた研究代表者の阪井が、現代における民謡の保存・育成の可能性をこの運動に探るためであった。しかし、フォークリバイバル運動がすぐれて政治的な側面をもつのは、アメリカに限ったことではなく、戦後西ドイツのこの運動も、同時代の政治状況や種々の社会運動と深く繋がっていることはすぐに明らかになった。

(2) 社会的なアプローチからのポピュラー音楽研究ではロック音楽の研究が大きな比重を占めており、アメリカン・フォークの歴史についてすら、纏まった研究がない状況で(当研究プロジェクトの途中で、「政治的フォーク」について国際比較にもとづく包括的な書が出版された)、ドイツ語圏フォークリバイバルに関しては、歌手、フォークフェスティバル主催者、フォーク専門誌ジャーナリストによる散発的な解説書や回想があるのみだった。

(3) 後述するように、ロマ音楽の研究者滝口幸子に連携研究者として、東ドイツロック音楽の研究者高岡智子に研究協力者として加わってもらった。オーストリア・ロマの音楽活動についての研究は、1990年以降に初めて研究プロジェクトが立ちあげられて本格化し、それと連動する形で、滝口の調査するロマの音楽フェスティバルも発展しつつある。東ドイツロック音楽については、日本ではその存在すら知られていないのが現状で、ドイツ語圏でも研究は進んでいなかった。

2. 研究の目的

(1) 18世紀から19世紀にかけて収集・出

版された民謡は、そのままでは図書館に保管されるだけで、本当の意味での復興とはいえない。民謡収集者が歌詞テキストと楽譜を提供した本来の目的がそうだったように、発表された民謡は実際にうたう目的で使用されてこそ意義がある。民謡集を活動した例としては、19世紀前半に始まり、拡大発展した合唱運動や、19世紀末から20世紀初頭のワンダーフォーゲル運動があった。フォークリバイバル運動は、ラジオ・テレビ、レコードの制作と販売が可能になった、従来とまったく異なるメディア環境で出発し、不特定多数の聴衆への発信が可能な運動となった。本研究の目的は、ワンダーフォーゲルの民謡をうたう習慣を、ヒトラーユーゲントをはじめとするナチスの各青少年団体が受け継いだため、第二次大戦後に若者の民謡離れが起こった西ドイツにおいて、1960年代以降に新たに始まった民謡復興の形を探求することであった。その際に「復活祭行進」をはじめとする平和運動、環境運動、学生革命との関わり、レコード会社との関係に注目し、他方、ドイツ民謡文書館に代表される研究機関との連携もみていくことにした。

(2) 他のドイツ語圏の国では、西ドイツのように社会運動と直接リンクしたフォークリバイバル運動はみられなかった。オーストリアに関しては、研究代表者が情報をじゅうぶん蓄積していなかったため、オーストリア国内のロマによる音楽活動を研究している滝口幸子に、連携研究者として加わってもらい、保守的な社会の中での民族的マイノリティによる音楽の復興・育成について研究を進めてもらうことにした。

(3) 西ドイツにとって、分断された国家の片方である東ドイツを意識せずに、いかなる活動もあり得なかった。政治的発言に対する制約の大きかった東ドイツでは、フォークリバイバル運動の政治的な面が強くなかったが、この点についてもさらに詰める必要が

あった。東ドイツの文化政策とポピュラー音楽の関係について研究を進める上で、日本ではまったく知られていなかった東ドイツロックの研究をする高岡智子に、研究協力者として加わってもらうことが肝要だった。

3. 研究の方法

(1) 3人の研究プロジェクト参加者は、それぞれのテーマについての資料を蓄積している文書館(阪井はフライブルク・ドイツ民謡文書館とマインツ・カバレット文書館とベルリンの科学アカデミー文書館、滝口はウィーン音楽院図書館、高岡はベルリンの連邦文書館や放送関連文書館)で、フェスティバル・プログラム、放送プログラム、関係者の書簡などの一次資料、それに新聞雑誌の批評記事などの二次資料の調査をおこなうとともに、社会学、民俗学、民族音楽学の分野での出版物を通じて理論的な基礎を構築した。

(2) 3人の研究者はそれぞれ、歌手、バンドメンバー、音楽フェスティバル主催者、作曲者などに会って、インタビュー調査をおこなってきた。フォークフェスティバルの全盛は1970年代だったが、後継フェスティバル(たとえば現在も続いている、東ドイツのロックを回顧する「オスト・ロック・クラシック」)を訪れる機会があれば、その実際を体験すると同時に、併せて関係者へのインタビューをおこなった。

4. 研究成果

(1) 民謡復興がいかに政治批判や社会改革への呼びかけに資することができるのか、フォーク歌手のレパートリーについて調べるうち、広く知られている民謡テキストのパロディや旋律の転用だけでなく、古い民謡を同時代のコンテキストの中でうたうだけで、批判や皮肉を込めることができるケースが少なくなかったことが分かってきた。これはとくに、直接的な批判を封じられていた東ドイツの歌手にとって有効な手段であった。ドイ

ツのフォークリバイバル運動においては歌手・フェスティバル関係者と、学術的な民謡研究の連携が強く、民謡資料を蓄積する各地の文書館には、フォーク歌手が頻繁に訪れている。また、浩瀚な民謡集を出版しているフォーク歌手も複数おり、従来とは異なる読者層への民謡レパートリーの浸透に寄与している。民謡文書館や図書館は、蓄積した資料の社会還元の方法を模索していることもあり、フォークリバイバル運動と民謡研究は相互扶助の関係にあることもみえてきた。

(2) それ以外での、フォークリバイバル運動に関する調査での大きな収穫は、従来から知られていた大学革命や平和運動との連動だけでなく、「政治の季節」終焉後の1970年代に、その受け皿となった環境保全運動や労働者の権利を守る運動のなかで、西ドイツのフォーク歌手が果たした役割の大きさが明らかになったことだった。原発建設計画を中止に追い込んだ南西ドイツ・ヴィールの著名な反原発運動については、南西ドイツ放送によるドキュメンタリー番組があり、またその中心にいた歌手ヴァルター・モスマンの回想がある一方、ルール工業地帯で炭鉱労働者の古い住宅を高層ビルに替える計画を阻止したフランク・バイアー他の歌手たちの活動については、まとまった資料がない。研究代表者はバイアーへのインタビューをおこない、音声資料の提供も受けているので、運動の経過と社会的・文化的意義について、これから著作にしなければならない。

(3) 東ドイツのフォークリバイバル運動にかんしては、どれくらい情報が集められるか不明であったが、西ドイツのフォーク関係者や文書館司書の協力で、複数のインタビューをおこなうことができ、代表的な「政治的な歌のフェスティバル」については、後継フェスティバルを見聞し、主催者から話を聞くことができた。明らかになってきたのは、東ドイツの歌手やリスナーたちが、種々の手段を

用いて西欧諸国のメディアにアクセスしており、西ドイツはもちろん英語圏からの影響も予測以上に強かったことと、東西ドイツのフォーク関係者たちの連携の意外な太さであった。これが再統一後のドイツで、東西両方のフォーク関係者によるドイツ語圏最大のフェスティバル開催へと繋がっている。

(4) 調査を進める過程で、東方ユダヤ人の言語イディッシュ語でうたわれた民謡の、ドイツのフォークリバイバル運動における重要性が浮かび上がってきた。ナチスの高官の復権を許した西ドイツの保守党ならびにナチス・ドイツの過去から目を逸らそうとする親世代に対する批判が、ユダヤ人の民謡を取ってドイツ人歌手が取り上げるという活動に結びついたのである。イディッシュ語をうたうドイツ人歌手に対しては、かなり広範にインタビューをおこなうのに成功したため、彼らの活動の動機や困難や葛藤について、詳細に知り、考察を進めることができた。

(5) 東ドイツの事例について調査・考察する上で欠かせなかったのは、研究協力者・高岡智子との連携であった。民謡それ自体はもともと国の伝統として尊重されていたため、フォーク歌手の取り上げる歌は、東ドイツで放送・上演する上で新たな枠を作る必要がなかった一方、アメリカ合衆国起源のジャンルとして規制の対象になっていたロックの場合、東ドイツロックはただ楽しいのみの娯楽とは異なる「娯楽芸術」であるという定義付けが必要だった等、相互比較による発見も少なからずあった。1990年以降の東ドイツロックの復興について、高岡はおもにオスタルジー（再統一後のドイツに対する失望から、旧東ドイツ国民のあいだに広がる「昔は良かった」感と、西ドイツや他の西欧諸国民に広がる旧東ドイツ・デザインへの愛着）の一環として捉えるところから出発したが、1980年代後半以降にあらわれた新たな音楽潮流と東ドイツロックの繋がりが、本研究プロジ

ェクト期間の調査を通じて、次第に明らかになってきた。

(6) 連携研究者の滝口幸子は、オーストリアへの調査旅行で、1980年代を皮切りに90年代以降次々と、ロマ民族の「民族集団」としての認可のためにオーストリア各地で結成されたロマの自助組織の実態と、そうした自主組織が主催する音楽フェスティバルを実地調査した。一口にロマ民族と言っても、オーストリアには主要な職業や入国経路によって複数のサブ・グループがある。滝口は、フェスティバルごとの色彩の違いが、主要な出演者を出しているロマのサブ・グループごとの違いに端を発することを明らかにしたうえで、とくに2つの主要な「ロマ祭」に着目している。ひとつは、むしろ職業音楽家で身を立てるロマがほとんどいないサブ・グループのロヴァーラが中心というフェスティバルで、もうひとつは、国内外から6ないし7グループずつ多様なサブ・グループの参加するフェスティバルである。ロヴァーラは基本的に職業音楽家でないが、それゆえにかえって、他の主要なサブ・グループの音楽の影響を受けず、独自の民謡伝統を守ることができている。

そうした具体的な事例に則して、ロマの異なるサブ・グループ同士、あるいは非ロマとロマとの音楽を通じての交流の場として、サブ・グループ同士の違いの認識・交流・衝突を通じて、ロマ民族の新たなアイデンティティが形成される場として、音楽フェスティバルが機能している実態が明らかになった。

(7) 最終年度のシンポジウムは、研究プロジェクトに参加した3人の研究者が、それぞれの関心から発表をおこない、活発な質疑応答も続いた。阪井と滝口の研究は、伝統音楽の復興という点で、これに対し阪井と高岡の研究は、東ドイツの文化政策とのバランスを探究する点で、共通していた。対象もアプローチもさまざまだったが、民族的あるいは言語的マイノリティや若者・一般市民が、政治や社会の矛盾に対して声を上げるのを助けてきた、対抗文化（カウンターカルチャー）としての音楽の姿が、共通の要素として浮か

び上がってきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

阪井葉子、「殺人者の国」に響く故郷の歌
ドイツのフォークリバイバル運動における
イディッシュ・ソング、大阪音楽大学紀要、
査読有、51号、2013、5-23

阪井葉子、ドイツに響くユダヤの歌 ~、
春秋、査読なし(依頼原稿)、2013、1月号
17-20、2/3月号 20-23、4月号 20-23、5月号
20-23、6月号 24-27

阪井葉子、民謡歌手モルデハイ・ゲビルテ
ィグ フォークリバイバル運動のなかのイ
ディッシュ語民謡、ドイツ文学論攷、査読有、
2014、53-76

滝口幸子、Expressions of Women in
Lovari Music、城西国際大学紀要メディア学
部、査読有、25巻5号、2017、19-32

高岡智子、東ドイツ映画音楽実験工房
- 統一ドイツポピュラー音楽の意外な起源、
ドイツ研究、査読有、51号、2017、

〔学会発表〕(計 6件)

阪井葉子、戦後ドイツでうたわれたイデ
ィッシュ語歌謡、大阪大学ドイツ学会、2016
年11月19日、大阪大学文学研究科

Sachiko TAKIGUCHI、Refugees in
Japan: Cultural policy and their musical
surroundings.、国際伝統音楽評議会「音楽
とマイノリティ」研究グループ第8回国際シ
ンポジウム、2014年7月19日~23日、国
立民族学博物館

滝口幸子、ロヴァーラの音楽伝承メカニズ
ム、MCE研究会(比較による中・東欧モダ
ニズムの研究会)例会、2015年1月23日、大
阪大学文学研究科

高岡智子、「娯楽芸術」からポピュラー音
楽へ - 東ドイツの文化政策を中心に、日本文
化政策学会第8回年次大会、2014年12月7
日、京都橘大学

高岡智子、統一ドイツポピュラー音楽の意
外な起源 - 東ドイツ映画音楽・文化政策・亡
命ユダヤ人、日本ドイツ学会第32回全国大
会、2016年6月12日、早稲田大学早稲田キ
ャンパス

高岡智子、『東ドイツのポピュラー音楽』
について、第27回ドイツ現代史学会、2017
年3月30日、広島大学

〔図書〕(計 7件)

伊東信宏編、阪井葉子、高岡智子共著、東
欧演歌の地政学、アルテス・パブリッシング、
2017年後半出版予定(入稿済み)

川田都樹子、西欣也編、高岡智子共著、平
凡社、アートセラピー再考 - 芸術と臨床の
現場から、2013、118-142

高岡智子、ナカニシヤ出版、亡命ユダヤ人
の音楽、2013、328

川越修、河合信晴編、高岡智子共著、ナカ
ニシヤ出版、歴史としての社会主義 - 東ドイ
ツの経験、2016、138-165

滝口幸子(分担執筆)、教育芸術社、高校
生の音楽の教科書、2013、74-77(ロマの音
楽について)

滝口幸子(分担執筆)、教育芸術社、小学
生の音楽鑑賞・表現 DVD 第6巻5年鑑賞・
表現、7巻6年鑑賞・表現、2015、DVD全
10巻、解説・音源提供

滝口幸子(分担執筆)、教育芸術社、音楽
鑑賞「世界の民族音楽」、2017、39、音源提
供

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪井葉子(三谷葉子)

(SAKAI, Yoko / MITANI, Yoko)

大阪大学文学研究科招へい研究員

研究者番号: 50243142

(3) 連携研究者

滝口幸子(TAKIGUCHI, Sachiko)

城西国際大学メディア学部助教

研究者番号: 30615430

(4) 研究協力者

高岡智子(TAKAOKA, Tomoko)

静岡大学情報学部講師(2017年3月まで)

龍谷大学社会学部講師(2017年4月より)